

栄光

説教

『使徒パウロ』

イザヤ書6章1節～8節
コリントの信徒への手紙Ⅱ1章1節～2節

岸 俊彦

説教……………1
特集・イースター 新しい希望が与えら れるとき……………2
追悼・ 加藤フジエ姉 佐藤秀彦兄……………5
説教・ 長山道先生……………6
図書茶話会報告…7
長老のファイル…7
牧師の書齋から…8

コリント教会に宛てた手紙に

は、パウロの気持ちそのまま出ています。手紙を通してコリント教会の人たちの気持ちも分かります。双方の喜びや悲しみ、苦悩や憂いがあるまま手紙になっています。とても人間臭いと思います。私たちが2千年前の人たちは同じ人間です。同じような問題を抱えています。

キリストの福音は、私たちのような者を神が用いてくださって、今日まで伝え続けられてきました。神の御心だからです。

キリストの福音とは何でしょう。この手紙の冒頭、パウロの挨拶にはつきりと語られています。「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように」(1

・2)。

紀元50年前後、第2回目の伝道旅行で初めてギリシャ世界に足を踏み入れたパウロは、迫害され、嘲笑われ、絶望してコリントに逃れるようにやってきました(1コリント2・3)。50歳前後のパウロは失意のどん底で、思いがけずこの大都会で希望を見出します。1年半にわたって腰を据えてコリント教会をパウロは開拓しました。ユダヤ人キリスト者アキラとプリスカの夫妻やテモテがパウロを助けました。

「神の御心によってキリスト・イエスの使徒とされたパウロ」(2コリント1・1)です。神の御心がパウロと兄弟姉妹を結びつけています。教会が集まってきた人たちに「私たちの父である神と主イ

エス・キリストからの恵みと平和」を与えることが神の御心です。主の恵みと平和は、私たちが罪から贖い、死の恐れから解放することによって実現します。主なる神が

私たちを救ってくださるために、独り子主イエス・キリストをこの世界に遣わされました。このキリストの福音をすべての人に伝えるために、神はパウロを使徒として選び、遣わしました。テモテも同じです。コリント教会もキリストの福音を伝え、主を礼拝するたに建てられました。パウロもテモテもキリストの福音を伝えるのは、ただ神の御心によります。使徒としての生涯を主の御心が支えました。

私たちは神の御心によってキリスト者とされました。自分を見たら分かりません。お互いを見たら分かります。私たちはキリスト者とされるのにふさわしいことは何もありません。それにもかかわらず、主は私たちのことをよく見て、よく知って、選んでくださいました。主なる神は私たちの造り主です。私たちの心を究め、とらえてくださいます。私たちは主の御前に幼

児のように素直になることです。主が御心によって選んでくださったのでなければ、今、共に主の御前に集められ、私たちが礼拝していることはありません。

教会は神の教会です。神が人間を救うために建ててくださいました。私たちが人間の救いとは、ただキリストの苦難と十字架の死、復活と昇天によって実現された、主の恵みによる神との平和です。神との和解であり、神と繋がることによって与えられる平安です。私たちが何かをしたからではありません。私たちが何者だかというわけでもありません。ただキリストによります。神の御心によって、「わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ている」(ローマ5・1)私たちがです。主の恵みと平和に生きることができるよう、神の言葉であるコリントの信徒への手紙を、これから読み進めましょう。いつも繰り返ししている言葉で言うなら、神の言葉を食べ、わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和のうちに共に進んで行きましょう。

イースター

新しい希望が与えられるとき

復活されたイエス様との再会はどれぐらい大きなものだったのでしょうか。
「イースター」と聞くと、自然と私たちも大きな喜びがわきあがってきます。
皆さんにとってイースターはどんな意味を持つのでしょうか。

感謝しつくせない程の感謝

千久嘉和

私の人生は、おおよそ四期に分類できます。

第一の期間は戦争の苦しい時代。中学1年から勤労動員、空襲、家は焼かれ、着のみ着のまま火災の中を逃げまどう。一面の焼け野原。思い出ただけで身の毛がよだつ。

第二期は20才から30才ぐらい。キリストとの出会い。受洗、教会での活動、結婚と、どれをとっても充実した日々でした。

第三期の人生は、30才を過ぎて会社の組織に組み込まれた時期でした。振り返ってみると通算17回の引越を経験いたしました。妻にも子供たちにも申し訳ないことをしました。幸い勤務地が大都市であったため、地元のコーラス団体に入ったり、毎年かかさず「メサイア」を歌ったりしておりました。しかし、礼拝には出席しませんでした。まだ眠っていたのです。

第四期の人生は経堂北教会との出会いです。60才を過ぎた頃です。左肺下葉にガンが見つかり、ガンセンターで全摘出手術をしました。予後の散歩をしていた時、日本橋三越の前で学生時代の後輩に出会ったのです。経堂北教会聖歌隊の充実のための打合せとのことです。教会員でもない私が一緒にあって考える姿は、既に経堂北教会員の気持ちだったのです。このことは主のお導きだったのでしょう、とあとで思いました。勿論、後日許されて甲子園二葉教会から当教会に転会しました。新しい希望が与えられたのです。

イースターの朝は墓前礼拝が行われます。昨年は止むをえない事情で休みましたが、今年は前日ホテルに泊まって教会員の皆様と一緒に祈りを捧げます。



風立ちぬ

加瀬和子

2月、わが家の庭に梅が咲き始めていました。その脇には金柑の実が太りつつ、色づき始めています。また、その隣には万両の赤い粒が色増しつつ、たわわに実をつけていました。

朝毎に私は庭の花たちに「おはよう」と心の中で声をかけます。ポール・ヴァレリーの「風立ちぬ、いざ生きめやも」は私の好きな詩です。微笑む花、そよと吹く風に生きの力をふくらませている姿を思います。楽しみは目に見えない主からのプレゼント、復活の主は私たちの心に、希望という春風を送り入れてくださいました。

それは主による恵みのあかし。昨年の春先、何となく体調の不具合を感じていました。胸苦しさ、体のだるさに思考力も衰えます。息苦しさで体力の衰え、不如意な体を抱きながら病院の処方を受けつつ悩む日々でした。各種の検査

などを経て一年、或る日主はやわらかな明るい春風を私の体に吹き入れてくださいました。

それは主による約束のあかし。待ち望み願う心に夢を持たせてくださいます。主は私たちを立ちあげさせ、歩み行く力をそそぎ込んでくださっていることに気づかされます。「神は東風を天から送り、御力をもって南風を起し」（詩編78・26）。主の大きな恵みの傘の中に生かされている思いに感謝の日々です。

実は私が背負った病は肺塞栓症というややこしい病でした。肺が機能しなくなるといっておどろおどろしい病でした。何故このような病気にとりつかれたのか、考えもしない名でした。病院通いしつつ検査結果にもどかしささえ感じていました。投与される薬に祈りをこめていました。

そして或る日、主は柔らかな春風を私の心に吹き入れてくださいました。

春風は主のみ力をもって病を追い出してくださいました。復活された主の大きな恵みの傘の中に生かされている感謝の日々です。

希望をもって

高嶋明子

春を象徴する芽吹ききの植物を目にする度、理屈抜きに卵の殻を打ち破って出てきた、生まれたてのヒヨコの生命の図が頭の中で紐付きます。それは、新しい命が始まり、ベクトルは上向き、希望に満ちているイメージです。でもそんな希望などどうして持てようかと嘆くことの方が多い日々を過ごしているのが実情です。

昨半夏、朝から姉の電話で母の具合が悪いと知り、顔も洗わず、急いで実家のある駅まで駆けつけ、整形外科を受診する父母に付き添いました。これが現在に至る両親の介護生活の始まりでした。その2週間前には、腰が曲がってはいたものの、私が珍しくシューベルトの「ます」の1楽章を演奏するからと、暑い中聴きに来てくれたほど元気だったのに。日に日に母の首が折れ曲がり、バランスが取れなくなっただけで歩くこともままなら

なくなり、この先一体どうなってしまうのだろうか？ その頃出会った、母より少し若い女性が出演するコーラスのコンサートを聴きに行き、聖歌隊で歌うことを喜びとしていた母がこのようなステージにはもう立てなくなってしまうのかと想像すると、涙を拭いながら聴くほかありませんでした。

そのような中で、本当に大勢の多岐にわたる助けのお陰で、一進一退を繰り返して、困難を抱えながらも、毎晩2人して祈りを捧げ過ぎているのは、なんと有難いことだろうかと思えます。教会生活もろくに送ってもいないくらいで、なすが言うのもお門違いですが、イエス・キリストを仰ぎ、御言葉を糧とし家庭を築くことを貫き続けた親であるからこそ、生活に不便があつたり、親子夫婦がぶつかることがあつても、イエス・キリストという軸に戻り、支え合い、今があるのだと思えてなりません。私をこの世に誕生させてくれた親の今後の人生を、希望を持ちながら支えていくこと。イースターを迎えるにあたり、そう強く決意をもった2019年の春です。

イースター

原田 恵

少し前まで冬枯れの庭だったのに、ここ数日で驚くほどたくさん
の新芽が芽吹き、桜も咲き春が一
面にあふれ出しました。春とも
にイースターがやってきます。

「イースター＝卵探し」で、子
どもの頃はずっとそうでしたし、
親になってからも暫くはそうでし
た。一番楽しかった子どもの頃の
卵探しは、荻窪教会の小学科の時
に招かれて伺ったお宅で、隠し場
所のヒントの紙を渡され、そこに
行くと次の場所のヒントの紙があ
り…と続くゲームになっていて、
広いお家の中で大勢で走り回って
楽しかったのを覚えています。

長男が小学生の時、同じパター
ンでゲームをやったら大受けでし
た。子どもが夢中になる永遠の鉄
板ネタのようです。

原稿依頼を頂いたときは楽しい
思い出がたくさんあるし、筆が進
みそうな気がしました。が、始め

ると大変でした。イースター、こ
れは凄まじいお話だと思います。

十字架上のイエス様の死を見詰
める弟子たちは、世界が終わった
と確信する程の絶望感を味わった
ことでしよう。すべての希望が消
え、自分たちも追われる身になっ
たのです。凄まじい衝撃です。し
かし、主は三日目に甦り、エマオ
の途上に弟子の前に現れます。全
ての希望を失った者の前に、そ
れを大きく上回る新しい永遠の命
の確信として。その後の使徒たち
の熱心な、超人的なほどの伝道の
過程を知ると、その凄まじさが想
像できます。神以外の何者も恐れ
ない確信と永遠の命の確信が瞬時
にインストールされたのでしよう
か。羨ましい。

生きていると楽しいことも沢山
ありますが、大変なこと、苦しい
こと、もう耐えられないと思うこ
とも時にはあるかと思えます。で
も、イエス様目線に切り替えるこ
とが出来ると、自分の狭いものの
見方から抜け出し、永遠の命に迎
え入れられ、聖書物語の世界の扉
の鍵を手に行っている幸せを感じま
す。

イースターの意味

青木みぎわ

私にとってイースターとはどん
な意味をもつのか、正直にお話す
ると、この原稿を頂けたことが、
深く向き合い改めて考える良い機
会となりました。感謝いたします。

「イエス・キリストの復活」と
いう出来事を自分はどう受け止め
ているのか、二つ自分の中で感じ
ていたことがあります。一つ目は
「神様がいるという事実を強く感
じること」。二つ目は「復活され
た事実から私たちも新しくなれる
という喜びと感謝」。イースターを
思うとき真つ先に出た思いです。

一つ目は幼い頃から触れてきた
ことに繋がります。幼い頃の自分
にとってはたまごをもらう日。復
活された意味を深い部分でわかっ
てはいませんが、この出来
事を昔から感じられたことは、感
謝だなと思っています。それは、
死んだ人が復活するというあり得
ないことをどうしても受け止めら

れないという声に対して、私は一
度も疑問に思ったことがないから
です。むしろそのあり得ないこと
がずっと昔から世界中で祝われて
きた事実が、より自分の信仰の確
信になっていきます。神様が常に自
分のそばにいて下さる安心感、言
葉では表しきれない心の穏やかさ
と強さを得ることができています。

二つ目は今自分が生活していく
上で支えとなっている思いです。
イエス様の復活が私たちの救いの
保証であると、本当に深い部分で
理解できたのはいつだったか定か
ではないのですが、今でも教会に
行く度にいつも気付かされます。
迷いが多い日々、人に対して優し
くなれなかったり、傷つけてしま
ったり、罪を犯しています。わか
っていてもできない弱さに葛藤し
ています。でも十字架の死を耐え
てまで私たちの罪を償ってくださ
った苦しみを思う時、私たちはも
っと強くなるべきだと感じます。
そして復活された事実、罪が赦
された喜びと感謝を感じます。
復活されたイエス様との再会、
今後どんなことが起きても、光と
力強い希望を持てる私の証です。

追悼

加藤フジエさんを偲んで

故・
加藤フジエ師

2月14日、経堂北教会での加藤フジエさんのご葬儀に参列しました。多くのご家族に見守られ、温かい葬儀でした（お子さん4家族・孫8人・曾孫14人）。山田仲子さんのお誘いで教会に来るようになり、46歳で村田牧師より受洗。それ以来主に従い守られて、104歳の生涯を全うされました。

加藤さんは90歳を過ぎた頃、私の母（小倉京子）に「経堂北教会で葬儀するにはどうしたらよいのか」と再三話されていました。「まず岸先生にお願いして…」と答えていたようですが、ご家族の宗教を考え、非常に真剣でした。略歴と愛読聖書箇所、讃美歌を記して岸先生に預け、同じものをご家族にも渡してあったと聞きます。「加藤家の宗教は浄土真宗で、私はそれを大切にしています。で

も私はキリスト教徒なので、その信仰を尊重してほしい」とご家族に常々語っておられたそうです。

葬儀の際に岸牧師より、受洗された時にご本人が書かれた栄光の文が紹介されました。「教会に入るまで私は、自分は何も罪など犯した事はない、人に恥じる事も、神様に助けてもらわなければならぬ行いもしていないからと、神様に対しては本当に無関心で自分本位でした。山田姉妹の導きと励ましによつて、1回2回と教会に足を運ぶ毎に神の御言葉を聖書を通して教えられ、私の心の中は数限りない罪の深い人間である事に気づきました。これからの歩みの中で、神の独り子イエス・キリストを罪からの救い主であると信じる事ができるのは大きな喜びです」という内容で、私は感動しました。加藤家はすずらん通りでポンプ屋さんを営んでいらしたので、教会関係者の多くがお世話になりました。最後の3年間は福生市のホームで過ごされましたが、経堂の街のキリスト者として、敬虔に生きられたその姿は私たちの誇りです。

(林崎光子)

主の御旨は計り知れない

故・
佐藤秀彦 氏

2月22日佐藤秀彦^{しげひこ}さんが天に召されました。享年47歳でした。葬儀は2月25日高知教会で行われました。司式は土佐嶺北教会の徳安早人牧師が担ってくださいました。申し訳ないことに日程的に高知まで飛んで行くことができず、弔電を打ちました。

「恵さん、碧衣さん、董さん、雪花さんと共に主がいてくださいます。私たちが罪から解き放ち、死に勝利され、復活された主イエスの慰めを心から祈ります」。

世田谷から御一家が高知に移住されたのは、2011年3月11日の東日本大震災による福島第1原発の爆発がきっかけでした。「震災後の4月、原発と国の対応への不信から妻と2人の子供は、四方を山に囲まれた川の美しい高知県に移住してもらいました」と当時のことを『栄光』に記しています。その後世田谷の3カ所で経営し

ていたパン屋を閉めて、ご自分も高知に移住しました。パン屋として成功していたのに……と思ったりしました。パン職人として繊細な秀彦さんは、「効率や生産性を重視し、売上を伸ばすことを最優先に考えるだけでいいのかな」と東京の生活を振り返っています。

新しい高知での生活は、「少ない収入と少ない出費。でも自然の中で心豊かに暮らしています。自分が次の世代に伝えたいのは、経済優先の社会のシステムではなくて、自然の中で心豊かに暮らしていくための知恵です」と記していました。そして自らの生活を「豊かな負け組」と呼びました。

日本で1番収入の少ないと言われる高知で、農作業などをしながら「何もかも新鮮でした。豊かな自然も魅力的でしたが、何よりも気さくでおおらかな人々に魅了されました」。四季折々の自然の恵みと厳しさの中で人々が心豊かに暮らしている所に、子供たちを受け入れるサマースクールのようなものはできないかと考えていた秀彦さんでした。主の御旨は私たちからは計り知れません。(岸俊彦)

〈教会形成と伝道に励むために〉

説 教

『新しい掟』

レビ記19章18節

ヨハネによる福音書13章31節～35節

東京神学大学准教授 長山道

「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい」(ヨハネ13・34)。この掟の、いった

いどこが新しいのでしょうか。むしろ、あまりにもありふれた教えのように思われるかもしれません。

それはおそらく、わたくしたちは誰とでも仲良くするように子ども頃から教えられて育つたからでしょう。他人を傷つけないよう気を遣い、社交辞令を学び、誰とでもうまく付き合う努力をしています。一方、自分が嫌われることを恐れ、苦手な人の前でも調子を合わせることは、常にストレスと隣り合わせです。誰とでも仲良くするなど幻想ではないかという考え方もあるでしょう。そういう場合には、この掟は非現実的な、甘い考えだと批判されるかもしれません。

肯定するにせよ否定するにせ

よ、こんなふう理解している限り、この掟は古い掟でしかありません。

主イエスはこの掟を「あなたがた」、つまり弟子たちに与えられました。弟子たちとは、「世に属していない」(15・19)人たちです。ですから、ここで命じられているのは、世界中のすべての人ではなくて、主イエスの弟子たちだけです。ここで言われている「世」とは、「神が造られた世界」ではなく、神から閉ざされた領域を指しています。それは、神によって捕えられていないということ、神以外のものに囚われてしまっているということでもあります。もし「嫌われたくない」、「否定されたくない」、「ばかにされたくない」という思いに囚われるなら、「人はわたしを嫌うのではないか」、「攻撃するのではないか」、「ばかにする

のではないか」という不安を抱え続け、人を裁き、自分を裁くことになるでしょう。そこに神は登場しません。例えばそれが、「世に属する」ということです。

主イエスは「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」(34節)と言われました。主イエスの愛が最もよく現されているのは、やはり十字架です。主イエスは人から攻撃され、嘲られ、否定されて、十字架上で命を捨ててくださいました。主イエスの弟子であるということは、この恵みを通して愛を知っているということですが、

ですから、「互いに愛し合いなさい」という掟は、人間は誰でもみんなと仲良くすべきと楽観的に言っているわけではありません。主イエスの弟子たちが愛し合うということは、気の合う仲間同士だけで仲良くしていればよいということではありません。神に対して自分を閉ざしていた人間が、キリストを通してただ神のものとされることによらなければできないことです。そのとき、この掟は初めて全く新しいものになります。

主イエスがまずわたくしたちを愛して、兄弟を愛することを示し、さらに愛することそのものを可能にしてくださいました。恐れや不安と隣り合わせになりながら、周囲と円満な関係を保つよう気を配るのではなく、恐れを締め出す愛を生かせることができるようにされました。

こうして互いに愛し合うことは、「神が造られた世界」としての世と隔絶して生きることではなく、むしろ世を真実に愛することにもなります。「互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる」(35節)と主イエスは言われました。神の愛に生きる者の群れであるわたくしたちですから、神が独り子をお与えになったほどに愛された世(3・16)をも愛することへと導かれるでしょう。そのとき世はもはや不安や恐れの対象ではなく、むしろ不安と恐れのとおりである世に対して、わたくしたちが恵みにより生かされる喜びの証人の群れとして用いられます。それが教会の伝道ではないでしょうか。

図書茶話会報告

2月17日の午後にかナンの部屋で十人以上の参加者を得て、図書茶話会が行われました。

はじめに、「本との出会い」ということで、幼少期の読書の体験として、お向かいの桜岡さんのお宅にあった『ナルニア国物語』を勝手に読ませてもらったことを話しました。このナルニア国物語はC・S・ルイスというイギリスの神学者の書いたファンタジーで、その話には、キリスト教の物語やメッセージが暗喩されていて、世界の始まりから終わりまでが、ナルニアという国の誕生から終わりまでを表されています。私は記憶力が極端に悪く、一度読んだ本の内容を二週間もするとすっかり忘れてしまうので、このナルニア国物語を何度も読んで、毎回、次はどうなるのだろうとわくわくして読んでいました。すぐに忘れてしまう自分の「才能」を得意に思ったものです。

ほかに、大学時代の友人の書いた『ロスト・ケア』という本を宣伝させてもらいました。日本ミス

テリー文学大賞新人賞を獲った作品で、高齢者介助施設を舞台にしたミステリーです。因みに私の名前も出てきます。

また、私が子どもの頃に多かつた戦争児童文学作品から『太陽の子』や『ふたりのイーダ』を紹介いたしました。『太陽の子』をきっかけに沖繩に興味をもち、大学の卒業論文で「戦後戦争映画における戦争認識」の分析として、各時代における「ひめゆり部隊」を主人公にした作品を扱いました。また、大江健三郎の『沖繩ノート』を読み、またその後、彼が名誉棄損で訴えられた慶良間での集団自決に関する訴訟から、沖繩の碑文に興味をもったことを話しました。毎年訪れるようになった沖繩について、座間味島の「慶良間諸島の集団自決で生き残った人々の証言集」を紹介しました。

会では、子どもたちが映像作品では見られないことなどが話題になりました。短い時間でしたが、有意義なひと時となりました。

(大友太郎)

長老のファイル

3月の長老会は、転入会希望者の承認から始まりました。3月にも転入会がありました。イースター礼拝でも転入会式が行われる予定です。この教会の業に共に加わりたい、と話されました。それぞれの人生の中でこの時、この場所、御計らいの不思議と貴重な時であることを改めて思わされました。

4月からお迎えする狩野伝道師の担当される説教、祈祷会、CS、委員会などが確認されました。准允式、就任式・歓迎会が久しぶりに行われます。

3月から4月へは年度の切り替え、反省と計画の時です。毎月定例の協議の他に教会総会の準備を続けています。この2年、牧師1人の体制でしたが、主日礼拝、祈祷会、行事、各委員会活動などが着実に豊かに守られてきました。感謝です。教区、支区の働きにも岸牧師の東京教区総会議長、信徒の支区委員、婦人部の役員など、責任を持って加わっていて、身近

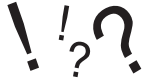
につながりを覚えるものです。新年度も一つひとつ着実に、教会の活動が続けられるように言葉に聞きつつ、祈りを合わせ思いを一つにしていきたいと思えます。

葬儀が続く、家族の中でご様子などを伺うにつけ、自分の家族内での姿勢、伝えたいこと、伝えるべきことをはっきりとしているかを、改めて考えさせられています。独りよがりにならず、力まず、でも譲らず、とは難しいことですが、やはり日々のことだと思わされます。恵まれた教会生活を続けることができているのですから、その喜びが伝わるような毎日でありたいと願います。

礼拝に出席がかなわない方が増えていきます。問安委員会ですること、工夫しながら、礼拝の恵みをお届けしたいと願っています。こちらが気づかないでいること、ご要望など、どうぞお聞かせください。

(昭内眞知子)

個人消息



牧師の書齋から

主任者となつてからデータベースで牧会日誌をつけています。それ以前は思いついた時に日記をつけていました。今はほとんどつけることはなくなりました。

時々、「1年前、5年前は何をしていたのだろう」と、日付を打ち込みます。その日の主だったことが画面に現れます。

昨年のは、葬儀が4回続きました。2018年4月1日のイ

ースター発行を目指した創立80周年記念誌『いつまでも続く教会』が届いていました。最後の編集、校正、とくに写真のキャプション付けが思いがけず大変でした。教会総会資料の編集、毎月の栄光原稿のまとめと依頼、受難週の集会、もちろん説教や集会の準備もあります。歳のせいもあり、その疲れを夏まで引きずっていたように思います。

「今年度末も大変だけれど昨年に比べれば楽か」と思うと少しホツとします。3月31日の日曜日が

あるおかげで、昨年より1週間得した気分になります。年号が変わることなど気になりません。キリスト教暦で教会は動いているからです。この時期には分かっているのですが、「イースターが何日か」が一番気にかかります。今年4月21日と有難い日程です。

最近皆さんのご協力と、PC、メールのおかげもあり、今回の総会資料用の原稿は既にほぼ集まりました。年度の反省と計画原稿は、長老会を経て完成です。その前に責任役員会でも協議します。

毎年同じことの繰り返しなのですが、少しずつ変化しています。自分の変化もあり、教会員の変化もあり、世の中も変わります。この変化が神の恵みだとしたら、嬉しいことです。

4月から2年振りに伝道師が就任します。きつとよい変化となるでしょう。ほんのわずか上向いた教勢が刺激され、ますます上向きとなるようにと思います。何よりも御言葉によつて教会が変えられます。ますます主の栄光を現すことができますようにと祈ります。(岸)

掲示板



- 受難週祈祷会
4月17日(水) 午前10:30 / 午後7:00
- もより教会合同受難週礼拝
4月18日(木) 午後7:00 経堂緑岡教会
- 受難日祈祷会 4月19日(金) 午後1:30
- イースター墓前礼拝
4月21日(日) 午前7:30 春秋苑教会墓地
- イースター礼拝 4月21日(日) 午前10:15

編集後記



▽新しい年度も共に主を見上げて歩みましょう。(沢田)

「栄 光」2019年4月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧師：岸 俊彦
編集：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp